

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19965

研究課題名（和文）日本近代における写真経験-写真アルバムを中心に-

研究課題名（英文）The Photographic Experience in Modern Japan: Focusing on the Photo Album

研究代表者

安田 和弘（YASUDA, KAZUHIRO）

早稲田大学・文学大学院・助手

研究者番号：40905957

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アルバムの蒐集と調査といった基礎的な史料調査を行うとともに、ヴァナキュラー写真論を導き手としながら、日本近代における「撮る」「撮られる」「蒐める」といった写真受容や表現の内実を検討した。その作業を通じて、アルバムを編集し眺めるといった行為の意味を考察するとともに、また公/私境界線上にあるアルバムを位置付け、アルバムを史料として論じる可能性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の写真研究が指摘してこなかった人々の写真受容・表現を、アルバムを通じて実証的に明らかにし、人々が残した写真群を新たな視点から捉えなおすものとして位置付けることができる。ゆえに本研究は、日本写真史の新たな記述可能性を切り拓いていくための基盤を成すだけでなく、人々が残してきた/残していく膨大な写真・映像（イメージ）と向き合うための理論的視座を提供するといえよう。

研究成果の概要（英文）：This project examined the reception and expression of photography in modern Japan, including "taking," "being taken," and "collecting," by conducting basic archival research on collecting and surveying albums and by investigating the theory of vernacular photography. Through this work, we examined the meaning of the act of editing and looking at albums, positioned albums on the borderline between public and private, and clarified the possibility of discussing albums as historical documents.

研究分野：写真史

キーワード：写真史 写真アルバム ヴァナキュラー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19世紀に写真が発明されて以降、産業としても文化としても写真は大衆と深い結びつきを有してきた。そのなかでも、家族写真に代表されるような私的な写真は、もっとも多く撮影されてきた写真、そして誰も最初に目にする写真といえる。そのような写真はアルバムとして、どの家庭にも一冊はあるといえよう。アルバムは日常生活を記録し、記憶し、記念するための最も手頃なメディアの一つとして多くの人々によって製作されてきた。

しかし、アルバムは、それらが残された膨大な量に比して、長らく写真史の周縁に位置してきた。なぜなら、美的価値や歴史的価値を重視する従来の日本写真史において、アルバムに収められる写真の多くは、私的領域にある、平凡で退屈な、第三者の目を引く写真ではないと考えられてきたからだ。「芸術的」な写真でも、「歴史的価値」を有した写真でもない。その大切さが主張されることはあれど、被写体を知らない人にとっては退屈なもの、あるいは論じる価値のないものと長らく考えられてきた。

しかし、その残された量、また関わっている人びとの数という点を踏まえれば、日常的で私的な写真の代表であるアルバムは、私たちの映像文化や社会的経験の中心に位置してきたことは疑いようがない。写真アルバムは、人びとが写真を用いて自らの生の歴史を紡ぐための重要な視覚メディアであったし、いまなおそうあり続けているといえよう。本研究は、このような写真アルバムに注目することによって、従来の写真史が取りこぼしてきた、人びとの写真受容や表現の一端を明らかにすることを目指して構想されたものである。

2. 研究の目的

上記のような問題意識を背景としながら、本研究は明治から昭和40年代までに人びとによって製作された写真アルバムを蒐集・調査するとともに、欧米を中心とするヴァナキュラー写真論を検討する。写真アルバムの歴史的な調査と理論的な考察によって、「撮る」「撮られる」「蒐める」といった写真受容や表現の内実を明らかにし、日本写真史の新たな記述可能性を切り開いていくための基盤を整えるだけでなく、人びとが残してきた、残していく膨大な写真・映像（イメージ）と向き合うための理論的視座を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

上記の目的を遂行するため、本研究は以下の方法をもって実施する。

(1) 写真アルバムの蒐集・調査

日本において私的な写真群は言及の対象とならないだけでなく、美術館や博物館等において蒐集の対象となることもなかった。ゆえに、アルバムを研究対象とするにあたっては、アルバムを蒐集することからはじめねばならない。次に、蒐集したアルバムに付されたデザインや形式、収められた写真の時代的变化を読み解く。また、当時の新聞や雑誌、業界紙等のアルバムをめぐる言説を調査し、どのような写真アルバムが生産・流通し、人びとがいかなる写真を収めていたのかを整理する。

(2) 写真アルバムに付随する行為についての理論的考察

一枚の写真とは異なり、アルバムは複数の時間や感覚が介在している。写真を集め、貼り、書き込む。一人で、あるいは複数人で眺め、写真以外の物も使用され、事後的に改変される。アルバムを制作し眺めるということは、物、写真、被写体、受容者の身体が絡み合っている実践といえる。このようなアルバムに付随する「行為」の意味を考察するために、欧米を中心とするヴァナキュラー写真論の検討、および応用を試みる。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下のように整理される。

(1) まずは、欧米を中心とするヴァナキュラー写真論について検討・読解する作業を行なった。ここ20年ほど、美術史、人類学、歴史学、社会学、黒人研究、女性史など、多様な学問領域がヴァナキュラー写真について論じており、そこではアルバムの意味を問い直す研究が次々と生み出されている。例えば、ジェフリー・バッチェンのヴァナキュラー写真論、エリザベス・エドワーズによる物質文化論、マーサ・ラングフォードによるオラリティーとしての写真アルバム論

といった、写真を「読む」のではなく、写真を「語る」ことに重きをおいた研究が挙げられる。彼、彼女らが試みているのは、単一の写真から複数形の写真、従来の写真史や理論が重視していた「写真とは何か」という問いから「写真は何をするのか」という問いへの転換であり、特定の文化的・社会的文脈の中で生産されたモノとしての写真の働きの検討である。また、ティナ・キャンプやローラ・ウェクスラー、アリエラ・アズレイらの議論も重要である。彼らに共通しているのは、人々の写真アルバムに公的/私的の緊張関係を見出し、そこに政治性を見出そうとしている点であるといえよう。以上検討した論考において共通しているのは、アルバムを特定の社会的機能やパーソナルな心理的情緒に還元せずに、個人の物語を創出する場として、また社会・文化的な複雑な関係性のなかにある動的なモノとしてアルバムを捉えなおすという点にある。彼らは、写真の有する物質性を重視し、写真が見るものに与える感情的でパフォーマンス的な側面に注意を向け、そしてアルバムを絶え間ない対話を誘うメディアとして論じているといえよう。こうした理論の整理および応用を示すものとして、一冊の写真アルバムを「語る」とはどのような経験であるのかを「写真 アルバムを「語る」-物質性・オラリティー・パフォーマンス-」と題して、早稲田 表象・メディア論学会 第23回研究発表会にて報告した。そこでは、実際にアルバムを「語る」場に立ち返り、アルバムを作るといふこと、アルバムを見るという行為が有する実践的な意味について、ジェフリー・バッチェン、エリザベス・エドワーズ、マーサ・ラングフォードの議論を紹介しつつ考察した。具体的には、編集者と鑑賞者が出会う場としてアルバムを捉えなおし、編集者と鑑賞者の相互作用のなかでアルバムの物語が立ち現れることを、実際に1930年代に製作された一冊のアルバムをケーススタディーとして取り上げ、精緻に分析することによって明らかにした。また、ヴァナキュラー写真論の視点を踏まえ、日本写真史に通底するスナップ美学を論じた、甲斐義明『ありのままのイメージ スナップ美学と日本写真史』の書評も公開した。

(2)一般的にアルバムは、制作者の家族写真を中心とした私的な記憶を紡ぐものとして考えられてきたのであり、収められる写真は家族写真といった私的な領域に位置づけられるものと考えられてきた。しかし、史料検討を通して、アルバムには一般に流布していた絵葉書や皇族・政治家・軍人のプロマイド写真が多く収められていることが明らかになった。そこでは、パーソナルなコンテキストと歴史的なコンテキストが、制作者の書き込みや写真以外のものがコラージュされることによって深く絡みあっている。具体例を挙げると、アジア・太平洋戦争期には陸軍が「満州事變」を記念するというかたちで兵士たちに「絵葉書帖」(アルバム)を支給していたのであり、また従軍を記念するデザインを付されたアルバムも一般に販売され多くの兵士に利用されていた。こうしたアルバムには、陸軍恤兵部が発行したプロバガンダ絵葉書や、従軍写真師が報道目的で撮影した写真、戦地で採集した花々や戦友の肖像写真などが、編集者の書き込みとともに収められているのである。このようなアルバムについて、2022年10月2日(日)京都大学映画メディア合同研究室第二回シンポジウムにおいて、『歴史』に参加する-アジア・太平洋戦争期における写真の位相-と題して発表を行った。そこでは、アジア・太平洋戦争期に製作されたアルバムをデザインや、写真の編集の仕方等に注目したうえで、アルバムが公/私、記録/記憶の境界線上に位置するメディアだと位置付け、兵士たちは絵葉書・写真を蒐集し、アルバムを編むことによって、戦争に参加する皇軍兵士として自己の輪郭を形成していたという理解を示した。このようなアルバムについては写真史において紹介されたことも言及されたこともなく、戦争と写真の関わりを考えるにあたって新たな視点を提供するものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安田和弘	4. 巻 13
2. 論文標題 (書評) 甲斐義明『ありのままのイメージ スナップ美学と日本写真史』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『表象・メディア研究』	6. 最初と最後の頁 119-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安田和弘
2. 発表標題 写真アルバムを「語る」物質性・オラリティ・パフォーマンス
3. 学会等名 早稲田 表象・メディア論学会 第23回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安田和弘
2. 発表標題 『歴史』に参加する-アジア・太平洋戦争期における写真の位相-
3. 学会等名 京都⼤学 映画メディア合同研究室 第⼆回シンポジウム
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------